

席慕蓉における詩と原郷

——日本語版アンソロジーを中心に——

The Significance of the ancestral home in the Anthology of Murong Xi Translated into Japanese

池上貞子

要旨

台湾女詩人席慕蓉是一位暢銷作家。在台湾和大陸都會經興起過席慕蓉熱。她的詩很受年輕人歡迎。大概因為這個緣故，有些學者認為她的詩太過於浪漫，不值得研究。其實，這位既做畫家、教師、散文家，同時又是妻子、母親的女詩人非同尋常。她的祖籍在內蒙古，自認為是成吉思汗的後代，並引以自豪。她三十年來的寫作生涯可以說是一個嚮往原郷，追求認同的過程。她怨恨青春不再來，不只是因為時間不能倒流，更是因為她當時沒能盛開。

她後來終於回到原郷，尋到了自己的根。可是她彷彿擁有了新的感概和追求。並將這些表現在詩歌裡。筆者有幸翻譯，編輯一部日文版的席慕蓉詩選。期盼著通過分析她的作品，考察她究竟是怎麼把對原郷的思念之情融入到自己的作品之中的，從而進一步探索她目前仍在苦苦尋求著的東西。

はじめに

台湾の女性詩人席慕蓉 (Xi Murong、シー・ムーロン、1943年四川省生まれ)^(注1) は今でもよく読まれる詩人だが、かつて「席慕蓉現象」と言われる一大ブームを巻き起こしている。1981年に第1詩集『七里香』が出版されると、1か月もたたないうちに増刷され、それ以後2か月に1度の割合で繰り返され、半年後にはエッセイ集2冊を出版した。そして翌々年の1983年に第2詩集『悔いなき青春』が出るとさらに拡大し、結局、1984年には彼女の著書6冊がベストセラーになり、そのうち3冊がベストテンに入るという具合で、「席慕蓉年」という言葉まで生まれた。あまりのヒートアップぶりに、大衆文学と見なす考え方や「糖衣にくるんだ毒」という言い方もあったという^(注2)。

加熱ぶりは改革開放の始まった大陸でもすぐに注目されて、1987年から89年にかけて続々と大陸版が出版され、一大ブームになった。こうした「席慕蓉現象」の理由としては、青春にまつわる幻想と憂うつを歌う内容に加え、言葉の平易さや流麗さ、イメージの清新さ、抒情的音楽性などいろいろあげられているが、ひとつにはその誠実さと純情さが、経済優先の社会の中で失わ

れていく人間性や人間関係の悪化などに不安を感じていた若い層に受け入れられたとも言われている^(注3)。彼女の詩は幸せな人生の花の盛りをイメージさせつつ、しかしそれは永遠ではないという意識があり、それゆえにこそ、詩あるいは絵画という表現手段によってその瞬間をとどめるのだという姿勢がある。

実は、彼女は社会的には詩人であるより先に、画家、美術の教師であった。もともと台湾師範大学で美術を専攻し、ベルギーに留学して研鑽をつみ、帰国後、新竹師範専門学校の美術学科で教鞭をとっていた。詩は子どものころから書いており、詩画集や女性雑誌への執筆という準備期間を経て、詩人としての正式な出発は1978年に『聯合報』に掲載した頃だと言える。

当時の彼女はすでに35歳、留学、結婚、帰国、就職、出産と、普通の女性より少し余計に経験を積んだ、もはや乙女とは言えない女性だった。この頃の彼女の詩は恵まれた現実生活を彷彿させる穏やかさと並行して、それとは対照的な表現、たとえば失われた青春、過ぎゆく時間に対するもどかしさなどがある。それらの表現はある程度青春詩に普遍的なものであり、このレベルで惹きつけられた読者も多いだろう。しかし彼女の世界には、時間、歴史、宇宙の大きな原則のなかの諦念のようなものがある。それは少女趣味どころか、宇宙的視野から人間を俯瞰した大人の視点である。

それともう1つ、彼女の詩が人を引きつける要素として、どうしても取り戻せない時間・空間に対する焦燥感がある。これは青春に関わる詩には常につきまとうものであろうし、また外省人と呼ばれる蒋介石政権の台湾移動前後に大陸から台湾に移り住んだ人たちに共通の感覚でもある。しかしながら席慕蓉の場合はさらにその奥に抱えるものがある。彼女の出自はモンゴル族、しかも外祖母は王族の一員であったようだ。台湾の教育の中で、漢族の側から当然のこととして語られる史実や価値観は、思春期の彼女の心には棘として刺さったこともあったのではないだろうか？

彼女の青春を歌う詩は、代表作「七里香」、「花咲ける樹」などのように、「それは美しいものであるが永遠ではない」と、大人として過去と現在を突き合わせてみせてくれると同時に、現実生活の中で心おきなく満開に咲くこと、つまりモンゴル族としてのアイデンティティを主張でききれなかった自分の青春（何しろその民族としての生活実感をもたないのだから）の欠落感という、いつまでも大人になりきれない部分がアンビヴァレンツに存在していて、その神秘性も大きな魅力になっていたのかも知れない。ちなみに彼女のモンゴル名はムレン、大きな河の意である。

筆者はこの度席慕蓉の日本語版アンソロジーを翻訳出版する^(注4)機会をもったが、収録する詩の選択と順序立ては原作者が行なった。本論では、そこに採られた詩を中心に、彼女の詩作営為を原郷すなわち父祖の故郷、言葉をかえて言えばエスニック・アイデンティティ追及の視点から考察してみたい。

1 6冊の詩集

詩人としての席慕蓉の骨幹を成すのは、テキストとして文末にあげた1～6の6冊のオリジナル詩集だ。他の間隔が2年から4年くらいであるのに対し、第3詩集『時光九篇』（1987）と第4詩集『周縁の光と影』（2002）との間には、12年の間隔がある。この間は決して空白ではなく、現に画集を4冊、エッセイを7冊出している。しかし、最も大きな出来事は、実は1989年夏にはじめて父母の故郷、そして自らの原郷ともいうべき内モンゴル草原を訪れ、その後はしばしばモンゴル圏に行くようになったことだ。

このことが席慕蓉の30年に及ぶ詩作に、劇的な変化をもたらしたであろうことは、想像に難くない。彼女の詩作全体を理解するために、モンゴル体験を中心とするそれ以前とそれ以後という時間の区切りを念頭において、代表的な詩の分析を通じて変わったものと変わらないものを探り、彼女にとっての詩の意味を考えていきたい。

まずは人口に膾炙している初期の代表作2編を見てみよう。

「七里香」

谷川の流れば海へといそぐ
けれど海の波は大地に帰りたがっている

緑の木白い花の垣根のまえて
あんなにも簡単に手をふって別れた

そして移ろいの二十年のあと
わたしたちの魂は夜な夜な戻ってきて
そよ風が吹くたび
庭じゅうによい香りを漂わす (1978)

「花咲ける樹」

どうやってあなたをわたしに逢わせてくださるの
わたしが一番美しい間に あなたに逢うため
わたしは仏さまの前で もう五百年間祈り続けた
わたしたちの世俗の縁が結ばれるようにと

そこで仏さまはわたしを一本の木にかえて
あなたがかならず通る道の端に植えた
太陽の光の下でつつましくどっさり花をつけた
ひとひらひとひらはみんなわたしの前世の願い

あなたはそばに来るとき ようく耳をすましてほしい
あのふるえる葉っぱはわたしの待つことの情熱
そしてあなたがついに知らん顔して通り過ぎたとき
あなたの後ろに一面に落るのは
友よ それは花びらなんかではない
わたしのしぼんだ心なのです (1980)

時や河の流れ、花、別れ、変遷、たましい、逢う、五百年（長い年月）、世俗の縁、待つこと……と言った言葉は、彼女の詩に一貫して頻出するものである。そして例えば「一番美しい時」というフレーズには、日本だったら、茨木のり子の「わたしが一番きれいだったとき」がすぐさま思い起こされるが、あまりにもストレートなこのフレーズを逆手にとって反戦を歌う社会意識濃厚な茨木の詩に対し、席慕蓉の詩は仏さまに祈って一本の木に変えてもらい、逢いたい人を待つという、ある意味ではすこぶる少女趣味的のイメージが思い浮かぶものの、一方では「世俗の縁」「前世」という「仏」に託した抽象化や時空の広がりがある。そして待ち人は「わたし」の存在にまったく気づかずに行きすぎるという「すれ違い」、あるいは「機会を逸する」という焦燥感、欠落感が見られる。これもすでに述べた「取り戻せない時間・空間」として、彼女の詩の特徴である。

いったい彼女の詩の多くは生活のリアリティに欠ける。いわゆる生活臭もないし、具象的な詩も少ない。具体的な生活の一断面を切り取ったような詩はごくわずかだ。（十字路で行きあった男子中学生たちの群れと自身の息子を重ねる「黄金時代の少年たちに」（1987）にはいくらかその要素が見られる）それはひとつには絵画やエッセイという別の表現手段をもつからということも考えられ、特にエッセイはすこぶる写実的である。詩の中にこうした生活臭、生活感のないことも、ある意味では少女趣味と取られる原因にもなっているのではないだろうか。先に述べた「糖衣にくるんだ毒」という批評も、このあたりにも原因があるのだろう。台湾の識者によっては、特に社会的な活動にかかわる人、その意識の強い人の場合、あまり彼女を高く評価していないような口吻が感じられた。それはともかくこの生活リアリティのなさは、ここで話題にしているモンゴル以前・モンゴル以後に関係なく一貫していて、時たま見られる例外はそれがモンゴル、あるいはその拡大された漢族以外の事物が関わってくるときだ。テレビで見たロプノール紹介の番組に

触発されて書かれた「楼蘭の花嫁」(1984)や、まるでムソルグスキーの「展覧会の絵」のように、ひとつひとつの展示物をたどっていく感のある「歴史博物館」(1984)などがその典型である。ただし、2編とも具象性はあるが、日常生活的ではない。先ほど述べたように、彼女には表現手段としてほかに絵画もあり、エッセイもある。エッセイは身辺雑記や感慨を内容とするものが多く、具体的・具象的である。

ならば詩あるいは詩作によって、何を追求していたのであろうか。先に紹介したごく初期の2編でもその兆候が見受けられるとおり、ひとつは言うなれば自分は何者なのか、この世に生きる意味、役割りは何なのかということだとも言える。このことは以下の詩などにも明らかだ。

「俗縁」

とてものことに
仏陀のように蓮華の上に静かに座っているなんてできない
わたしは凡人
わたしの^{いのち}生命はこのころげまわる俗界のちり
この人の世のすべてを望む
快樂であろうと憂い悲しみであろうと
自分の荷物は自分で引き受けるつもり

たとえいつか
あらゆる悲しみ喜びがわたしから離れていくのだとわかっている
わたしはやっぱり懸命に探し集める
あれらの美しくわずらわしい
彼女のために生きた価値のある記憶を 探し集める (1979)

2 郷愁

そしてモンゴルにかかわる境地も、「出塞の曲」(1979)「長城謡」(1980)の段階では抽象的・観念的だ。これらは郷愁によって、あるいは郷愁そのものを歌っていると言えるが、この段階では彼女にとってはこの郷愁さえも実体験は伴わず、観念的でしかないからだ。ちなみに台湾における外省人のノスタルジア＝郷愁については、しばしば白先勇の例が引き合いに出される。最近、白先勇の代表作『台北人』を翻訳出版した山口守はその解説のなかでこう言う。

……例えば人は生まれてから死ぬまでの間に、別離や失恋や夢の挫折など多くの喪失体験をするのが普通だが、通常は主観的時間を客観的時間の中に置いて対応することができる

ので大きな軋みを生まない。ところがその客観的時間を形成するものが劇的に変化する時代を生きる場合は、両者の乖離から強い喪失感や懐旧感情やノスタルジアが生まれ、逆に言えば、それによって初めて人は記憶を自分の中に保ち続けることができるのである。『台北人』が描くのは、正に過去を記憶として認識しながら現在に投影せざるを得ない人間の哀歌なのだが、その喪失感は「紐約客」シリーズ^(注5)に比べて遥かに強く、また深く人の心に突き刺さる。それは帰還すべき現実の場所を持つ望郷のノスタルジアに比して、『台北人』が描き出す失われた過去の時間へのノスタルジアは、時間が失われて帰らぬ以上、帰還すべき場所を最初から持たず、絶望的なまでに個人の記憶に頼らざるを得ないからである。……^(注6)

けれども席慕蓉には原郷に関してこの頼るべき「個人の記憶」さえない。彼女の原郷への思いはノスタルジアというにはあまりにも想像的、観念的でしかないが、いずれにせよ親族、とりわけ父親というチャンネルによって繋がれているようだ。まだ見ぬ遥かなる原郷を念頭においたと考えられる代表作「出塞の曲」(1987)の生まれた背景について、彼女はこう書いている。

わたしがベルギーに留学していたとき、ミュンヘンの大学でモンゴル語を教えていた父親を訪ねた。ふたりでキャンパス付近を散歩していると、通りがかった草地がまだ草を刈ったばかりで、清新な匂いを放っていた。すると父親が、「わたしの故郷の草の匂いにそっくりだ。もう何年もこの匂いを嗅いでないなあ」と、深々と息を吸いこんだ。もう暮れ方のことで、雀は高い梢でさえずり、巣に帰ろうとしていた。空いっぱいには黄金色の暖かな夕焼けがあふれていた。

その時、わたしは深い悲しみに襲われた。故郷を後にしてこんなに長い年月がたっても父は千里の草原に対する記憶を大事にしている。でも、故郷を見たことのないこの娘には、淡々と先ほどの言葉を吐くだけだった。父の心の中には仕舞われている口に出さない郷愁には、どれほどのものがあるのだろうかと思った。父といっしょに深々と息を吸いながら、暮色のなかで草の香りに触発され、「あの長城の外にしかない清々しい香り」というフレーズがひらめいた。その後、何年もたって、台北郊外の自宅で深夜に灯火の下にいるとき、とつぜんこのフレーズがよみがえり、その後は考える必要も手直しの必要もなく、一気に詩全体が浮かんできた。「出塞の曲」はそうしてできた。^(注7)

父を通じた原郷への手がかりは、実は他にもある。彼女は好んで蓮(芙蓉とも言う)を描き、自らも栽培したりしている。三百号の大きな絵や連作も描いているし、大判の画集も出版している。1988年夏にはインドネシアのバリ島に1か月滞在して、毎日蓮を描くということまでやっ

た。このような傾倒ぶりに対しては、花そのものに対する芸術家としての美意識のことなどさまざまな解釈があるが、本人の語るところはこうだ。

記憶の中で最も早い蓮は、おそらく5歳のころだったろう、父が玄武湖（南京）へ連れて行って、蓮の間にボートを浮かべて蓮の覆いを作ってくれた。

父の懐は安心感があって温かく、それを独占できたことは、幼いわたしにとってドギマギするような喜びと誇らしさがあった。その記憶に続いているのは、黄昏の湖面にしびよる少し灰紫色の暮色であった^(注8)。

その後、大学生になって台北の国立歴史博物館の蓮池で写生をし、他の人の写生のでき具合を見て、それまでの自信が揺らいで悔しい思いをしたエピソードもよく知られていて、画家としての人生には大きなインパクトになっているようだが、彼女と蓮の関わり、ひいては詩作、アイデンティティ追及の人生は、この玄武湖の思い出が原点になっているのではないと思われる。と言うのは、彼女たち一家は翌年には大陸を後に香港に出、そこで小学教育を終えたあと、54年には台湾に移り住んでいるからだ。つまり蓮は彼女にとって、幼児期の父の愛とともに、大陸の、そして出自の、つまり帰るべき場所の象徴なのだとも言える。ましてや、その父は1950年代にドイツの大学にモンゴル語の教授として招聘され、1998年に亡くなるまでずっと彼の地に在住し、モンゴルの故郷へも一度も帰ることのなかった人であった。

幼い時の彼女の記憶には、王族の末裔としての母の矜持や同族の大人たちの郷愁、モンゴル文化への哀惜が満ちている。しかし彼女自身にはそこで語られる内容の実感がない。そうした欠落感や焦燥感にかすかな希望の光を投げかけていたのが、玄武湖の思い出だったのではないだろうか。つまり蓮は彼女にとって失われた故郷の空間のみならず、モンゴル人であると言う、いわゆるエスニック・アイデンティティへの手がかりであり、「戻れない、取り戻せない時間」という彼女の詩に頻出する感覚は、ここからきているのではないかと思う。こうした心情を表白した詩は枚挙にいとまがないが、「父の故郷」（2000）、「聴講生」（2001）などはモンゴルを実感したあとも、なお埋め尽くせないもののあることを歌っている。これはふつうの女性が実感する「失われた花の盛り」という感覚以上のものだ。彼女は多くの少女にとって無自覚な「花の盛り」である思春期に、すでに欠落感をもっていた。彼女の初期の詩には、それを直截的に表現できない鬱屈という毒が潜んでいるとも言える。それはともかく、こうしたモンゴル体験以前という状況を現在から振り返り、日本語版アンソロジー出版に際し席慕蓉自身がこの時期の最後においたのが、「懸崖の菊」（1984）であることは、彼女の詩の特徴を象徴している。なぜなら、この極々短い詩は、自分のあるいは自分の詩作のありたい状況を端的に表現しているからだ。

雪のように 白く
火のように烈しくくねくねと深い深い谷底に伸びていく

わたしのその秘めたる願望
それは秋の日に最後に満開と咲く一群の
懸崖の菊

この詩が作られた1984年は台湾で「席慕蓉年」と呼ばれるブームが起きた年で、「最後に満開と咲く」というフレーズはその時点ではその現象も象徴していたかもしれないが、全体から考えれば時間よりは空間的な位置づけが可能だと言える。こうしたつつましかではあるが芯の強い印象に対し、同じころ書かれた「招待状」は〈いっしょに花火を見に行きませんか〉と読者に呼びかけて誘い、その花火は〈生命の狂おしい喜びと刺すような痛み〉であると認識しながらも、それを一瞬のものと達観し、鑑賞しようというものだ。やや明るく積極的な印象で、日本語版ではモンゴル以後の幕開けの位置に置かれている。

3 原郷へ

さて、6冊のオリジナル詩集のうち、先に紹介した詩を所収する前3冊と次の詩集の出版との間には12年の間隔が開いているが、先の述べたようにしかし詩作は行われていたし、画集やエッセイ集など表現活動も活発だった。ここではモンゴル圏行きによって、父祖の故郷すなわち原郷と心身との関わりができ、自己再編を行っていたと言えよう。1987年は先に紹介したように大陸で彼女がブレイクした年であるが、台湾に住む彼女の身边でも大きな出来事があった。1987年秋に40年近く実行されてきた戒厳令が解除され、やがて大陸への渡航も許されるようになったのである。その頃書かれた「秋の来たあと」(11/8)では〈病癒えた〉と言っているのも、ある種の一段落感があったのではないかと思う。同じ時期(11/18)に「黄金時代の少年たちに」という詩があり、十字路で見かけた中学生たちの集団に、わが子の姿を重ねると言う、ほんの一瞬ながら日常生活の一断面が切り取られていて珍しく具象性をもっている。同じ感慨についての表と裏なのかもしれない。

そこには解放感とともに、「それなら自分のこれまでの生き方は何だったのだろうか」という思いがあったにちがいない。これは台湾の他の作家、特に外省人系の人たちには言えることで、たとえば朱天文の『荒人手記』にもそれらの総括を彷彿させる言辞がところどころに散りばめられている。「……あの幸福な時代には、信じるだけで、疑うことなどなかった。／アイデンティティの問題もなく、神は天国にいて、世の中は平和だった。」^(注9)と語る一方で、「神話、そして忘却。／連続性、そしてこの連続性の破壊。／未来、現在、過去は一様に、記憶の過ちをもつ。」^(注10)と

記している。席慕蓉の場合には、多重的なアイデンティティ問題と複雑なノスタルジアを抱えており、たとえば以下の詩は、読者をたじろがせずにはおかない。

「交易」

彼らがわたしに教えてくれた 唐王朝の時代には
一頭の北方の馬は四十四匹の絹と交換したと

わたしの今日まで虚しく過ぎた四十年の歳月は
誰に向かい
誰に向かって交換してもらえばいいのあの見渡すかぎりの
北方の 草原と (1987)

ここには持って行き場のない憤りや悲しみ、苛立ちなどさまざまが感じられるが、その後モンゴル体験を経たあとではそうした感情は沈澱し、自信や落ち着きを得ている。

「野生の馬」(1994)では〈ただ闇夜のなかでだけ／わたしの靈魂は復活できる〉として、モンゴル馬になって、北方の広野に向かって疾走をする自らをイメージする。また「大雁の歌」(1994)では、領土を失い、歴史を塗り替えられても民族の魂と記憶は残っていると、〈おまえが青空の上でゆっくりと両の翼を広げるたびにきつと／わたしたちの^{たましい}靈魂が刺しぬかれ記憶が押し開かれることだろう〉と、傷つき失われつつある草原のために雄々しく歌う。これには民族の風格を我が物としつつある自信が感じられる。中国語表現とモンゴル語表現の対比により、人間の感情の不変性を歌う「モンゴル語レッスン」(1996)や自身の人生と詩作歴を「仮面」・「春分」・「詩」という言葉に象徴させた「歳月三篇」(1996、改99)改などではかなり民族としてのアイデンティティに寄り添ってきている。

この背景には近年ますます頻繁になってきた(ただし2008年には夫の病気と死があったため、皆無だが)モンゴルにかかわる活動がある。彼女のモンゴルとの関わり方は、詩や絵画という作品制作のほかに、社会的な活動もかなりある。たとえば、1992年にはモンゴル民間音楽工作者を台湾に招いて録音を行なったり、モンゴル国赤十字の招きで、ウランバートルおよび中央省付近の地区に行き、現地の孤児院、寄宿学校、特殊教育・児童福祉機構などを訪問して、モンゴル経済の困窮状態が子どもたちに与えた影響と傷の理解に努めている。帰国後は九千字の報告書にまとめてスライドも作り、講演活動も行うと同時に、台湾の慈善団体にも協力を呼びかけたようだ。また最近の2005年には黒水城、居延海を訪れたが、河川工事により周辺の胡楊が枯れる恐れが出ていて、牧畜民たちが不安になっていることを知り、地元や中央(北京)のメディアにこの問題を直視するよう要望している。このほか、国内外のさまざまな場所で開かれたモンゴルおよびモ

ンゴル文化に関する交流会に出席し、台湾では講演やシンポジウムでの発表など、啓蒙活動を行い、あたかも「モンゴル教」（というものがあるとすれば）の伝道師のようである。

4 詩と原郷

こうしてモンゴルが身近になった、第5詩集、第6詩集に収録された詩では、本来の彼女の持ち味である自分の位置の確認や使命の追及などと、モンゴルが交錯しあい、新たな迷いやもどかしさの揺れ戻しもある。「詩成る」（2000）では〈窓の外では時がいま万物を追い払って静寂に帰らせた／窓の内のわたしはなぜまだ詩を書こうとしているのだろう〉と、個人史とその外にある中国・台湾の近代史がある種の方向性を見出した時点での、自己を再確認する姿勢がある。こうした行きつ戻りつの心情を吐露している詩の例は枚挙に暇がない。「徐夜」（1999）では〈黎明を待つ〉という心持があるが、「父の故郷」（2000）では〈父はわたしに故郷を残してくれた／けれどわたしはほんの一部しか書き表せない／取るに足りないほどほんのわずかしさ〉とか〈父はわたしに故郷を残してくれた／けれどそれは／誰に二度と到達することのできない場所〉と、あいかわらずのもどかしさや絶望感を隠せない。しかし「聴講生」（2001）になると、〈「故郷」という授業では／わたしには学籍もなければテキストもない／ただ遅まきの聴講生になれるだけ〉という感慨と並行して、広野にたくましく咲くヒエンソウや疾走するモンゴル馬の群れを静かに見守る自分の姿をありありと描いてみせ、決して虚しい思いばかりにとらわれてはいない。

アイデンティティの充実感はやはり自信へとつながり、彼女らしさである自己確認と合体する。日本語版の書名ともなった「契丹のバラ」（2001）では、詩人としての出発点で漂っていた「七里香」の花の香りは、四半世紀を経てさらに長い時間と広大な空間を貫くものとなっている。〈もしも書くことでほんとうに昔を取り戻せるなら／一編の詩の生命は／一輪の 契丹のバラのようであってほしい〉〈まるであの果てしない広野で／契丹人が深く愛したバラが今まさに音もなくほころび／その名状しがたい馥郁たる香りが／今まさに千年の時を 通りぬけているように〉。

こうして近年は民族の女神を歌った力強い「創生記詩篇」（2004）や聖祖チンギス・ハーンへのオマージュと思える「讃歌」（2004）などによりアイデンティティを強め、自分なりのやり方でアイデンティティと現実生活との折り合いをつけるべく、民族の音楽に特徴的な重畳の方法を取り入れた「わたしはわたしの愛をおりたたんでいる」（2002）を歌い、「遅まきの渴望」（2002）を抱えながらも心にあかあかした灯をともした「駅」（2004）を置き、「同族を探し求めて」（2002）を置く。日本語版アンソロジー全体の最後にこの詩を置いたのは、まさにモンゴル教の伝道者と言うにふさわしくないだろうか。

「同族を探し求めて」

なんという常と異なる静けさ
だがその瞳は暗闇のなかで燃えあがった
わたしが一編の詩を朗読したあとに

喧噪の世界に身をおきながら

わたしはこうして識別する 誰が

わたしの隠れ同族かを

(2002)

おわりに

先にモンゴル教の伝道師とも言うべき席慕蓉の活発な社会活動について言及したが、それと並行して、自分自身のエスニック・アイデンティティの欠落を埋めるための、彼女の努力は脱帽ものだ。まず初めての訪問のあとは、大量の読書を行なってモンゴルに関する知識を補った。その後、度重なるモンゴル草原訪問の間に、考古学的あるいは観光地的なスポットを見学するだけでなく、民族文化を具象する長篇詩の歌い手や女性の獵師に会ったり、ホームステイによって牧畜民の生活を体験するなどして、民族魂というか、本来なら人生のもっと早い時期に体験すべきだった精神的な部分をも貪欲に吸収しようと試みている。そして2006年10月にはようやくモンゴル語を勉強し始めた。

6冊のオリジナル詩集に収録した席慕蓉の詩は長短取り混ぜて227編に上る。今回は筆者が翻訳担当した日本語版所収の作品を中心に、その特徴、とりわけ原郷であるモンゴルとの関連で考察した。そこに浮かびあがるものは、人口に膾炙した初期の少女趣味とも見える詩からモンゴル民族としての失われたアイデンティティを取り戻しつつある今日の作品まで一貫して変わらない「自分は何者か。自分はこの世で何をなすべきか」という、人間として真摯に生きる姿勢である。台湾、大陸で「席慕蓉現象」が起こった理由はこんなところにあるのだろう。その精神は千年の記憶を貫く契丹のバラから作ったローズ・オイルのように、彼女の詩の一編一編を匂い立たせていると言える。

テキストおよび主な参考文献

- 1 席慕蓉『七里香』台北・圓神出版社、2000新版、2006（20刷、初版は台北・大地出版社、1981）
- 2 席慕蓉『無恨的青春』台北・圓神出版社、2000新版、2006（17刷、初版は台北・大地出版社、1983）
- 3 席慕蓉『時光九篇』台北・圓神出版社、2006新版、2006（3刷、初版は台北・爾雅出版社、1987）
- 4 席慕蓉『辺縁光影』台北・圓神出版社、2006新版（初版は台北・爾雅出版社、1999）
- 5 席慕蓉『迷途詩冊』台北・圓神出版社、2006二版1刷（初版2002）
- 6 席慕蓉『我重疊著我的愛』台北・圓神出版社、2005

- 7 席慕蓉『世記新選』台北・爾雅出版社、2000
- 8 席慕蓉『席慕蓉=HSI Muren』台北・圓神出版社、2002
- 9 席慕蓉『席慕蓉和她的内蒙古』上海・上海文芸出版社、2006
- 10 向陽編著『台湾現代文選新詩卷』台北・三民書局、2005
- 11 古遠清『台湾當代新詩史』台北・文津出版社、2008
- 12 池上貞子編訳『契丹のバラ 席慕蓉詩集』思潮社、2009
- 13 林水福・是永駿編／是永駿・上田哲二訳『台湾現代詩集』国書刊行会、2002

注

- 1 席慕蓉略歴：1943年、中国四川省金剛坡に生まれる。原籍は蒙古チャハル盟ミンガン旗。1954年、台湾に渡る。1963年、台湾師範大学芸術系卒業。1964年、ベルギーに留学、1966年、ブリュッセルで画家として初めて個展を開催。以後、世界各国で個展を開く。1981年に最初の詩集『七里香』を刊行、1984年には台湾でこの詩集を含む著書6冊がベストセラーになった。
- 2 楊宗翰「詩芸之外—詩人席慕蓉与〈席慕蓉現象〉」『竹塹文獻』2001年1月号、第18期
- 3 参考文献10、p177、陳素琰「不敢成夢終成夢—席慕蓉的芸術魅力」参考文献7所収、p214など。
- 4 参考文献12
- 5 参考文献12、紐約客（ニューヨーカー）・シリーズ。白先勇が『台北人』に収録された作品と並行して、アメリカでの大学教師生活の中で書いたもの。『台北人』が台湾における大陸出身者のエグザイルとしての喪失感を描いているのに対して、アメリカにおける中国人のそれを描いている。
- 6 白先勇／山口守訳『台北人』国書刊行会、2008、p267
- 7 参考文献9、pp21-25
- 8 参考文献8、p8
- 9 朱天文／池上貞子訳『荒人手記』国書刊行会、2006、p64
- 10 同上 p245